

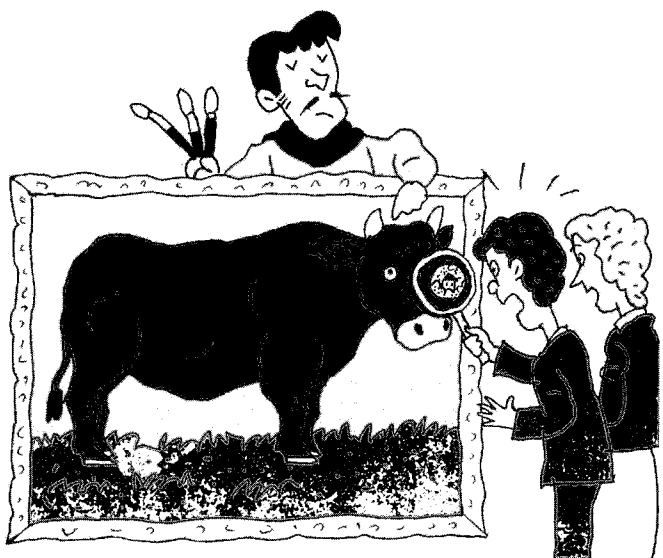
みなみかたくまぐす 南方熊楠専属画家の妙技 牛の目に映った風景を描く

南方熊楠は明治三十三年（一九〇〇年）十月、十四年間にわたる海外生活ののち帰国し、和歌山県へ戻って来た。しかし、父亡きあと、弟が家督をついだ和歌山に、彼の居場所はなかった。

植物・粘菌採集で紀伊各地をまわるうち、しばしば訪れた田辺にひかれるようになった。明治三十九年、熊楠は四十歳で田辺鬮鶏神社の宮司の娘・田村松枝と結婚、その後、死ぬまで田辺に腰を据えることになった。

田辺には、喜多幅武三郎（和歌山中学の同級生、医師）、毛利清雅（新聞「牟婁新報」社主、県会議員）、川島友吉（画家、草堂と号）など気の合う仲間が多く、研究や採集、論文執筆に羽を伸ばし、地方の片隅にしながら全世界に向けて超人的な活躍を続けた。

川島草堂という画家、中央ではあまり知られていないが、熊楠はその技量を高く買っており、東京の知人への書簡の中で「画は無双の上手なれども、惜しいかな勉強せず」とか「狂画の腕は暁斎（河鍋暁斎）幕末・明治の日本画家。鋭い描写力で評価が高い」の次」とまで



称えている。その腕の確かさは、昭和六年（一九三一年）国産審議院主催の勸業博覧会で一等賞金牌を受賞していることでも証明されている。熊楠は採集した菌類の描き手を依頼しているほどである。

この先生、熊楠からいろいろ指導を受けたせいか非常に注意力が強く、物事にこだわる面をみせた。ある時、牛が一頭立っている絵を描いた。この絵を見た人々が、「なんだ、ただの牛やないか」と言ったが、草堂先生、「よく見てや、その牛の目を見てみい」とのたまうのでよく見ると、なんと牛の目玉に映った景色が克明に描かれている。樹木から空、雲の流れる様、農家の庭まで、目の球面に映った通りにひびきをつけて描かれているのだ。見物人一同、あまりの見事さに、大いに感心したことであった。